



MONGOLIA

学校名： 川口市立戸塚東小学校

氏名： 佐俣 絵美

[担当教科： 小学校全教科]

● 実践教科等： 社会科

● 時間数： 時間

● 対象生徒： 小学校 6 年生

● 対象人数： 33 人

1 単元名 世界の未来と日本の役割

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- モンゴルの学習を通して、世界には異なる文化や習慣をもった国があることを知り、他の国の文化や習慣を尊重する態度を養う。(多面的、総合的に考える力)
- 我が国の国際協力や国際交流の様子を知り、世界で働く日本人に関心をもつとともに、世界の未来について考える。(つながりを尊重する態度)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元の学習内容は社会科「世界の中の日本」という単元で、我が国とつながりの深い国々、国際交流や国際協力の様子及び、平和な国際社会の実現に向けての日本の役割を具体的にとらえることをねらいとしている。児童は国際連合の働きや国際紛争、環境問題への働きかけなど異なる文化や習慣を大切にしながら、我が国が世界に向けて重要な役割を果たしていることを理解する必要がある。社会的事象について調べるだけでなく、モンゴルで活躍する人々の活躍やJICA、NGOで活躍する人々の声を聞くことで、世界の問題を自分のこととしてとらえる意識をもたせたい。また、自分にできることについて考え、自己の生き方についても考えるきっかけとしていきたい。

(2)児童生徒観

本学級の児童は素直で人との関わりを大切に思う児童が多い。一方で、知らない世界に対しては消極的な面が見られ、自分の周りの社会から世界へと視野を広げられている児童は少ない。第2学期始めのアンケート調査によると、「将来は様々な国に行ってみたい」と答える児童がいる一方で、昨今の世界情勢を鑑みてか、他国への恐れを抱き世界に関して興味・関心が低い児童が多くいるという実情が伺えた。そこで第2学期は総合的な学習の時間や道徳などを通し、積極的に世界に目を向ける機会を設けてきた。特に道徳においてはゲストティーチャーを招いて話を伺うなど、新たな世界の人からの話を聞く機会を設けるよう努めてきたところ、少しずつ世界への関心が高まってきている。

(3)指導観

国際化・多様化が進むこれからの社会において、「生きる力」と共に地球的な視野をもつことが重要である。児童は総合的な学習の時間、外国語活動や道徳の時間などの学習により、世界に関心をもち始めている。そこで社会科の授業においては社会的事象から児童なりの考えをもち、より広い視野から考えることを大切にしたい。また小学校6年生の第2学期後半という時期を考え、様々な人の生き方や考え方に触れさせることで、自分の将来や生き方を考えはじめるきっかけとなるよう、キャリア教育の視点も含め授業を行っていきたい。

5 評価基準

観点	社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
評価規準	我が国の国際協力や世界平和の大切さについて意欲的に考え、自分なりの考えをもとうとしている。	平和な国際社会の実現に努力し、向け努力する人々の願いや思いを考えたり、平和な世界にするために自分ができることについて考えたりしている。	地図や統計、写真などの様々な資料を活用し、必要な情報を集め、読み取り、調べたことを書いたりまとめたりすることができる。	我が国が平和な国際社会の実現に努力し、重要な役割を担っていること、平和な社会実現に向け努力する人々の活躍があることを理解している。
評価方法	ワークシート	ワークシート ノート	授業の様子、まとめのワークシート	ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	日本とつながりの深い国々～モンゴルを通して～	モンゴルを通して世界には様々な文化や習慣をもった国があることや異なる文化や習慣を尊重することが大切であることに気づき、次の学習への意欲をもつ。	写真を通して、モンゴルと日本を比較することで、日本とのつながりについて考え、世界には様々な文化や習慣があることに気づき、世界への興味・関心を広げる。 ※総合的な学習の時間（国際理解）の導入も兼ねて9月に行った。
2	環境問題の解決に向けて	モンゴルの環境問題を通して、世界の環境問題は深刻であることを理解する。	モンゴルのごみ問題、大気汚染の問題を知り、環境問題は世界で深刻な問題であることに気づくとともに、世界には様々な環境問題があることに気づく。
3	世界にある様々な問題と平和な社会実現に向けて	世界には様々な諸問題があることを知るとともに、平和な社会の実現に向けて諸問題を解決しようとする組織があることを理解する。	環境問題以外にも国際紛争など世界には様々な諸問題があることを知り、諸問題の解決に向け国際連合などの様々な組織が活動していることを理解する。
4	様々な支援、現地に根付いた支援	NGOやJICA、青年海外協力隊などの支援について知る。	調べ学習により、NGOやJICAなど世界平和に向け活躍する様々な組織があることを知る。また、それらの組織の活動や青年海外協力隊の活動について知り、世界で働く人々に関心をもつ。
5	世界で活躍する日本人	NGOやJICAの活動、青年海外協力隊で働く人の活動の様子や思いについて知り、自分の考えを深める。	青年海外協力隊やNGO、JICAの人の話を聞くことで、世界の諸問題解決に向け、努力する人々がいることを知り、生き方や思いについて考える。
6	まとめ	自分たちでできることについて考え、適切な方法で考えをまとめる。	振り返りを行うとともに、自分たちにできることを考えまとめ発信する。

7 授業事例の紹介 小単元名【世界で活躍する日本人】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月13日(火)第3校時

(イ)実施会場 6年1組教室

(ウ)本時の目標

NGOやJICAの活動、青年海外協力隊で働く人の活動の様子や思いについて知り、自分の考えを深める。

(エ) 指導のポイント

事前の授業ではODA、NGO、JICA、青年海外協力隊といった言葉の概要を捉えさせておく。本時では、「自分は世界で働きたいか」ということについて個人で考えた後グループで話し合わせ、「世界で働く」ということを自分の問題として考えさせた上、モンゴルで活躍する日本人の様子を紹介する。「海外への不安は、どの日本人もきっと同じだ」ということを想像させた後に海外で活躍する日本人の姿を見せることで、不安を上回るやりがいを感じ、懸命に働く日本人の姿に触れさせたい。また、まとめでは個で考える時間を十分確保し、考えを深めさせたい。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 2分	1 前の学習の想起	○以前の学習を想起し、環境問題をはじめモンゴルには様々な課題があることを思い出し、世界には様々な課題があることを思い出す。 ○ODA、JICA、NGO、青年海外協力隊の概要について想起させる。	一斉	・環境問題、紛争、ライフラインの整備など世界には様々な問題があることを想起する。 ・様々な問題の解決に向けて活動する組織や人がいることを想起させる。	・世界には様々な問題があることを理解しているか。 (発言)
学習課題 世界で活躍する日本人を知り、その思いについて考えよう。					
展開 15分 15分	2 海外で働きたいかどうかで話し合う。 ※授業づくりの視点【1】【2】【3】	○海外で働くということを自分のこととして考えさせ、他国のために働きたいなどのポジティブな面と、不安などのネガティブな面、両方の思いがあることに気づかせる。	個 ↓ 交流 ↓ 一斉	・「海外で働きたいということがよいこと」と捉えさせるのではなく、言語の問題や文化の違いなど海外で働くことへの不安要素があることも考えさせる。その上で、世界で活躍する日本人にも両方の思いがあることを想像させる。	・海外で働くことの決意や思いを想像できたか。 (発言) (ノート)
	3 VTRとスライドで、海外で活躍する日本人の思いを知る。 ※授業づくりの視点【4】	○NGOと協力する松本直子さん (青年海外協力隊) 【写真】 ○新国際空港で働く木原正智さん (JICA専門家) 【写真】 ○save the children(NGO)の岡本啓史さん 【VTR】 ○日本人学校で働く	一斉	・「障害児について関心があった」という動機、半年で言語を習得し他の国の人と協力しながら活動している様子を知る。 ・モンゴル人との考え方の違いから「めげそうになる」という木原さんの本音から苦勞がありながらも仕事をする思いに触れさせる。 ・「世界についてまず考えることが世界をよくすること」という思いを知る。	・海外で活躍する日本人の思いを知ることができたか。 (表情) (発言)

		山崎香葉子さん (青年海外協力隊) 【写真】 【手紙】		・日本のことを思いながらも懸命に働く思いを知る。	
まとめ 10分	4 まとめ ※授業づくりの視点【6】 【7】	○授業の感想をノートにまとめる。 ○数名の感想を発表し、互いの考えを理解しあう。		・海外で行くことがよいとするのではなく、児童応じた振り返りをし、授業の前と後の自分の考え方の変化や今の自分にできることについて考えられるようにする。 ・JICAで仕事するといふことへの思いや子供たちが様々なことを考えた様子を見ての感想など、教員とは違う視点での感想をいただく。	・世界で活躍する日本人の思いを考えられたか。(ワークシート)
3分		○参観されたJICAの方から授業の感想をいただく。			

(2) 授業の振り返り

- ・自分が会った方の生のメッセージを伝えることができたことで、児童にとっては世界で働く人が身近に感じられたようだった。
- ・児童の感想には様々な観点からの感想があり、その子に応じた振り返りができていた。

〔課題〕

- ・時間配分に課題がある。展開部分「自分が世界で働きたいか」というところより、まとめ部分に時間に十分時間を確保し、それぞれの変容を子供たち自身が相互に感じあえるような時間配分が重要である。
- ・参観のJICAの方から「世界で働くことがよいのではなく、自分にできることが大切」というメッセージを授業の最後にいただいたことによって、児童が「今すべきこと」を考えるきっかけになった。教師の方でもあらかじめ、この視点を抑えての指導が必要である。
- ・開発途上国の支援を「こちらが援助してあげている」という認識の児童がいた。授業の後に児童に話はしたが、相互援助という視点をきちんと押さえて指導にあたる必要がある。

(3) 使用教材

- ・現地の人や海外の人と協力しながら働く青年海外協力隊松本直子さんの写真
- ・新国際空港建設に携わる木原正智さんの(JICA専門家)の写真
- ・save the children(NGO)の岡本啓史さんのVTR
- ・日本人学校で働く青年海外協力隊山崎香葉子さんの写真と手紙



(4) 参考資料等

- ・『国際理解教育実践資料集～世界を知ろう！考えよう！～』 JICA教材作成実行委員会
- ・『新編 新しい社会6下』 東京書籍
- ・『新編 新しい社会6下 指導編』 東京書籍

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

モンゴルの紹介の授業(9月)

本校では第2学期の総合的な学習の時間で国際理解を扱うこととなっている。その導入も兼ねて授業を行ったのでこの授業ではモンゴルを通して、世界に目を向けることをねらいとした。教師がモンゴルの服を着たり、ゲルの模型や馬頭琴などを見せたりしたことで、モンゴルに興味をもった児童が多く、様々な文化を知ることの楽しさを知ったようだった。

【児童の感想】

- ・これからぼくはいろんな国の文化や伝統行事などその国の素晴らしいことを学びたい。また他の国ともっと仲良くなるためには、相手の国の良さを知り、さらに日本のよさを知ってもらい、それぞれの国のことを知れば仲良くなると思いました。
- ・日本とモンゴルは助けあっていたというところが心に残りました。東日本大震災の時に寄付してくれたことを知り、やっぱり助け合いは人と人だけじゃなくて国と国とでも必要なんだと思いました。朝とったアンケートを1回書き直したいです。私はあまり「外国に行きたくない」という考えでしたが、すぐ考え方が変わりました。モンゴルにすごく行きたいなと思います。でも、正直な理由はチーズと馬です。どちらも私の好きなもので好きなものがある国に行ったら私も幸せだろうなと思うからです。

環境問題の解決に向けて(モンゴルを通して)

【児童の感想】

- ・前の勉強でモンゴルの豊かさを知ったのに、ごみ処理をする場所や捨てられているごみを見て、がっかりしました。だけど、モンゴルの素晴らしいところもたくさんあり、日本も加わり協力し合っているのは素晴らしいことだと思いました。



【ごみ処理場の様子】
児童には、「何の場所か」と質問を投げかけ考えさせた。

世界で活躍する日本人(本時)

【児童の感想】

- ・「私は今回の授業を受けて、世界で多くの日本人が様々な場面で活躍していることを知りました。私の将来の夢は「世界中の子供たちを笑顔にすること」です。その夢のために、私は「国境なき医師団」というグループに入ろうと思っています。今日ビデオで見た皆さんのようにいつか私も世界で活躍できるようになれたらいいなと思います。そして世界中の子供たちを笑顔にしたいです。その今から出来ることを探してみようと思っています。
- ・ぼくは日本で生きたい。でも「言語が違う、他の国のことはわからないから行きたくない」というのは他の国に行くことをあきらめる理由にはならない。
- ・ぼくはさらに世界で働きたいと思いました。自分の国のことは知っているけど、開発途上国の環境は全然知りません。今ぼくたちは当たり前のように学習しています。日本では当たり前かもしれないけど、違う国では当たり前ではないかもしれません。また、日本の技術よりもっとすごい技術がたくさんあるかもしれません。日本の技術をその国に行って伝え、教えてもらい、さらに日本がよくなったらいいいなと思います。ぼくは世界や日本、どちらでもいいので活躍できたらいいと思いました。
- ・他国の援助をしたいと軽く言っていたが「援助」というのはとても大変なことなのだった。特に木原さんの受け答えの中の「めげそうになることもある」という言葉が印象に残りました。考え方の違いなどを乗り越えて援助ができているのを感じ、それだけ「この国の発展を手伝いたい」という気持ちがあるのだなあと感じました。JICAの方の「フィールドが違うだけで、外国で働くことがえらいわけではない」という言葉を聞き、外国ばかりで日本をおろそかにしてはいけないし、外国を無視することもできないということが伝わってきました。
- ・私の意見は変わりませんが、今日の4人みたいに外国で働く人がいるからこそ、日本でも働きたいと思うのだと思います。(略)日本人でもニュートリノなどの発見をして世界に貢献している人もいます。だから私も海外には行かなくても日本国内で何かを成して海外に貢献できるような仕事がしたいです。日本や海外ということにはこだわらず、地球上に存在する陸地が海で分かれているだけという考え方をしてもよいかと思いました。

【その他の変容】

- ・自主学習ノートで自主的にJICAについて調べてくる児童がいた。
- ・廊下にJICAの雑誌 mundi を置いてみたところ、真剣に読んでいる児童がいた。
- ・学年掲示板に開発途上国の記事を掲示したところ、立ち止まって読み意見を交換し合う児童がいた。
- ・普段なかなか自分の思いを話さない児童が「青年海外協力隊として活躍したい」と話した。
- ・自分の将来の夢と世界との関連について考え始めた児童がいた。
- ・授業の後に参観に来たJICAのスタッフに質問をする児童が多くいた。

⇒一番の変容は、自分の周りのことしか考えられなかった児童が、世界を意識するようになったことである。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

派遣前の事前の準備・研修

事前研修で「社会科」のどの単元でどのような授業を行うかについて考えたことで、目的意識をもって研修に参加することができた。研修中には他の参加者やJICAの方がインタビュー撮影等に協力してくれた。たくさんの方の協力で今回の授業になったと言っても過言ではない。残念だったことはたよい資料がたくさんあるにも関わらず、授業で扱う教材を精選しなくてはならなかった点である。他の機会をとらえ児童に還元できたらと思う。

他教科との関連 教科や指導事項を意識した授業の位置づけ

社会科「世界の未来と日本の役割」の単元は、本来であれば第3学期の最後に行う単元である。しかし今回の授業を行うにあたり、管理職や保護者への理解を得て第2学期に移行することができた。移行により歴史の学習からのすぐにこの単元に移ることになったが、結果としてはよかった。理由として、歴史学習で戦争について学んだ直後の今回の学習となったことで、児童の思考の流れが「歴史学習で戦争や平和について学ぶ」→「現代において世界平和のために活躍する人について学ぶ」となり、思考の流れがスムーズになったことが挙げられる。また、卒業文集を制作し将来について考える時期であったため、自分の将来の夢を実現したときに、世界とどんな風につながれるか、また今の自分にできることは何かということを考えることができた児童が多くいた。モンゴルの研修をどのように授業の中で位置づけていくかということは、課題であり、今後も研修参加者が考えていかなければいけないことだと思う。

10 教師海外研修に参加して

今回研修での成果は自分自身の意識の変化である。他国のよさや課題を目の当たりにすることで、今まで世界に目を向けることが少なかった自分が、研修中は「自分にできることはないか。日本の国にできることはないか。」とずっと考えていた。そんな中出会ったモンゴルで活躍する日本人は、仕事に誇りを持ち、日本やモンゴルのために必死で働いていた。その姿を目の当たりにし、「今、私自身がすることはこの国にいて、子供たちを育てることだ。世界に目を向けて自分の生き方を考えるような子供たちを育てたい。」と心から思った。そして帰国後も途上国の様子に関心を持ち、子供たちに伝え続けようと思うようになったことが自分自身の大きな変化である。

授業では児童の大きな変容を感じ取ることができた。特に本校は一部教科担任制を導入していることにより、3学級つまり約100名の児童に授業をすることになった。学級や児童の実態によって児童の考えは様々であったが、子供達なりにそれぞれが懸命に考えていたことが表情や感想から伝わってきた。世界について、未来について、また自分自身の生き方について考えようとする姿を感じることができたのは大きな成果であった。

研修に参加させていただいたからには、この経験を1年で終わらせてはならないと思う。自分自身が現地で感じた「自分にも微力ながらも世界に貢献できるのではないか」という思いを継続してもち続けることが大切であると思う。また国際理解教育を行うためには様々な人の協力を得ることも大切である。今回は学年・学校の協力もあり、他教科との関連を図ることができ、児童の意識の変容を大きく感じることができた。研修で感じた思いを伝えていくために、自分自身が変容し、理解を求めていくことも大切であると感じた。

